

## 平成23年度 京都府立大学地域貢献型特別研究 (ACTR) 成果

分類 番号	A25	取組 名称	“巨椋池系花蓮品種” 成立過程の解明と京都府内外花蓮品種の高精度 DNA 判別
研究代表者：		生命環境科学研究科	職・氏名： 准教授・久保中央
研究担当者：			
京都府立大学（久保中央） 外部分担者・協力者（白寄顕成氏、金子明雄氏、山本和喜氏）			
主な連携機関（所在市町村、機関（部署）名）			
京都府立植物園（京都市左京区）、京都花蓮研究会（事務局：京都市伏見区・金子 方）、 さくやこの花館（大阪市鶴見区緑地公園）			
<b>【研究活動の要約】</b>			
<p>昭和初期まで京都府南部に存在していた巨椋池（おぐらいけ）は、かつて蓮の花の名所であった。今では田畑に干拓されているが、干拓前後に採取された花蓮が“巨椋池系品種”として内田花蓮園（久御山町東一口）で維持栽培され、京都に息づく歴史を今に伝えている。しかしながら、巨椋池系品種の来歴については不明な点が多い。</p> <p>この問題に関して、本研究では昨年度に引き続き、巨椋池系品種を中心に花蓮を DNA レベルで分析し、類縁関係を調査した。</p>			
<b>【研究活動の成果】</b>			
<p>内田花蓮園から採取した葉から DNA を抽出して、SSR（単純反復配列）と呼ばれる DNA の一部を分析した。SSR は CTCTCT... のような配列が反復した構造を持つ DNA で（図 1）、反復数のバリエーションが生物種や個体ごと固有であるため、犯罪捜査の DNA 鑑定にも利用されている。</p> <p>分析の結果、25 個の SSR を用いて巨椋池系全品種（約 100 品種）と対照品種（約 60 品種）の DNA 型データを得た。このデータを基に樹状図を作成したところ、巨椋池系品種は 2 グループに大別された。巨椋池系品種は樹状図全体に渡って分布したことから（図 2）、巨椋池品種の成立には多様な個体があった可能性が示唆された。この他、特定の品種間で類縁関係が曖昧だったものが、DNA レベルで整理することが可能になった。</p>			
<b>【研究成果の還元】</b>			
<p>（成果報告会）</p> <p>H24/3/10「巨椋池系花蓮品種の DNA 鑑定と類縁関係」（京都府立植物園・京都花蓮研究会主催 ハス講演会、於：京都府立植物園、関係者等約 100 名出席）</p> <p>（報告書、論文等）</p> <p>報告書：「花蓮品種一覧 2012」（配布/閲覧 無）</p> <p>論文：日本植物園協会誌 第 45 号（印刷中）（配布/閲覧 無）</p>			
<b>【お問い合わせ先】</b> 生命環境科学研究科 細胞工学研究室 准教授・久保中央			
Tel: 0774-93-3526 (呼)		E-mail: nk0103@kab.seika.kyoto.jp	

